

40 怪談

場面：怪談師の高座

状況：怪談師が、彩と健太というカップル & 女の幽霊が登場する 噺をする

登場人物：A (男性、怪談師)

A: えー、今日はある大学生が体験した、ちょっとした怪談話をひとつ。

さて、大学生カップルの彩ちゃんと健太くん。彼らは夏休みに肝試し…要するに、怖い場所へ行ってドキドキして楽しもう、ということになり、地元で幽霊がでると噂の墓地…お墓で待ち合わせをしました。

「いやー、思ったより暗くて怖いな、ここ。」

「ね、本当におばけ出るかも…」

暗い道を懐中電灯で照らしながら進むと、突き当たりに誰かいる…？

「ひゃあ！」そこには白い服を着た女の幽霊が！しかし、その幽霊、どうも様子がおかしい。

「私、何しに来たんだっけ…？確か、何か大事なものを捜しに…」とぶつぶつ言いながら辺りを見まわしています。

かと思えば「あ、そうだ！ハンカチだ！」と慌ててポケットを捜し始めますが、見つからない様子。困った幽霊は、彩と健太に近づき、こう言うんです。

「あのう、私のハンカチを捜すのを手伝ってくれない？」

「え？」

困った顔をした幽霊を見ると、さっきの恐怖はどこへやら、なんだか気の毒な気持ちになって、ハンカチ捜しを手伝うことにしたのです。

「どんなハンカチなの？」

「確か、白いレースの…だっけ？」

「おいおい、うろ覚えなのかよ。」

なんて言いながら探すんだけど、一向に見つからない。その間にも、幽霊は「今、何してたんだっけ…？」などと、探していることすら忘れる始末。そのうち、幽霊は「まあ、いっか！また遊びに来てね！」とか何とか言って消えてしまいました。

「ああ…なんだったんだ、一体。」

「ねえ、あの幽霊、忘れっぽかったね。ハンカチの色もうろ覚えで、探してることも忘れちゃって。」

「でもさ、忘れっぽいのは、彩も一緒でしょ。」

「え、私が？」

「そうだよ。だって彩は、3年前に、もう…」

「え…」

その時…ふっと風が吹き、彩の姿は消え、彩がいたところにはお墓が一つ残っているだけとなりました。健太は一人、墓地を後にしました。

みなさん、もしかしたらみなさんも、何か、忘れていることがあるかもしれませんよ…。